



中学～高校生

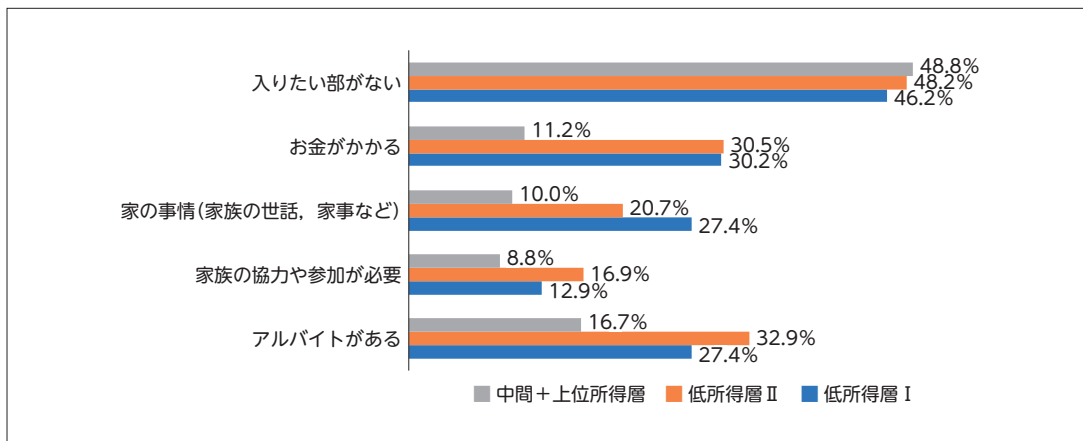


図 10：部活動に参加しない理由（複数回答）
 （「まああてはまる」＋「非常にあてはまる」の合計）

中学生や高校生のおよそ 2 割前後は部活動へ参加していませんでした。その理由は世帯の経済状況によって異なっており、所得の低い世帯の子どもは、お金の問題や家の事情で部活動に参加できていませんでした（図 10）。さらに経済状態は、子どもの自尊心に影響を与えていることも明らかとなりました。

まなび

所得が高いほど、成績が高いと答える児童・生徒の割合が高く、その傾向は中学生においてより顕著でした。中学生の結果（図 11）について、成績が（クラスの中で）「良い」と「やや良い」と答えた生徒の割合が、所得が高いほど多くなっています。一方、「悪い」、「やや悪い」と答える生徒の割合は、所得が低いほど多くなる傾向にありました。

「勉強が分からないときに誰に教えてもらうか」（援助要請）という質問で「先生」と答えた人の割合は、中学生では成績の良い者ほど多いことが分かりました（図 12）。この結果は、先生が生徒の援助要請に応えると成績が高くなる、ということを示すと考えられます。援助要請を促進する要因について検討してみたところ、①学校適応、そして②教師への信頼感が高い子どもほど、援助要請を行っていることが分かりました。なお、援助要請および①②のそれぞれの程度について、所得による差はほとんどありませんでした。これらのことから子どもの学習を考えるうえで、子ども同士の人間関係、教師 - 子ども間の信頼関係を築くなど学級経営が重要であるといえます。

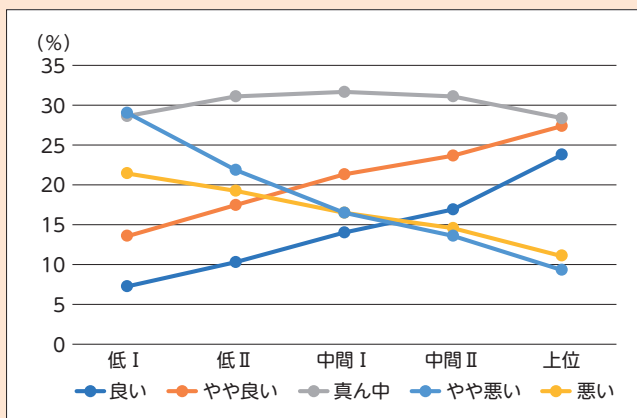


図 11：成績の自己認知（中2）

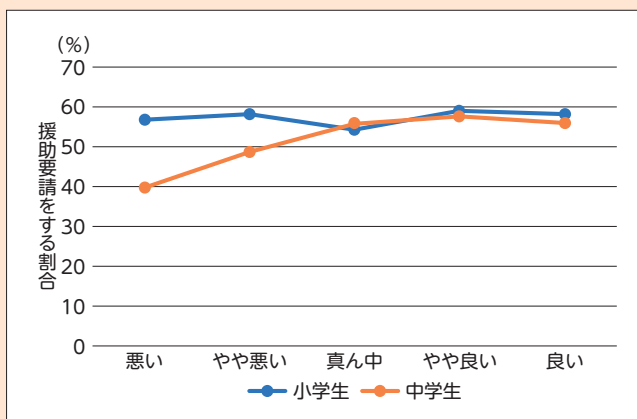


図 12：成績と援助要請（先生）の関係

進学

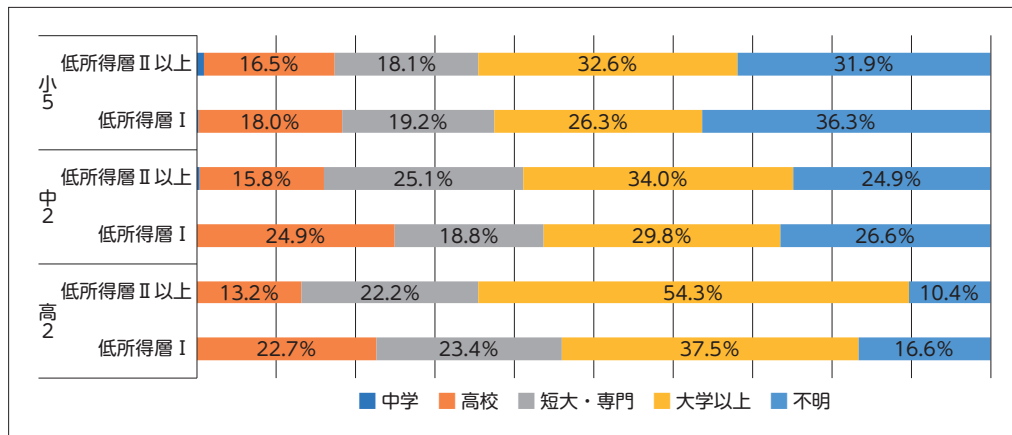


図 13：世帯の経済状況と子どもの進学希望

家庭の経済状況によって子どもの進路希望が影響を受ける可能性があることが分かりました。例えば、図 13 は低所得層Ⅰとそれ以外で進学希望を比較したのですが、中学 2 年生ではそれ以外の世帯に比べ低所得層Ⅰの子どもの短大・専門学校への進学希望が減り、高校までと答えた者の割合が増えています。また高校 2 年生では、それ以外の世帯に比べ低所得層Ⅰでは大学進学を希望する者が 20%近く減り、その分、高校まで、分からない（不明）と答える者の割合が増えました。

図 14 は、高校 2 年生に進学希望をたずねた結果のうち、「大学 / 大学院まで」と回答した人の割合です。

まず、地域差（通っている高校の所在地）がみられることがわかります。どの所得においても、「札幌」が最も高く、ついで「大学短大のある市町村」、「大学短大のない市町村」の順になっています。

「札幌」「大学短大のある市町村」については、所得が高いほど「大学 / 大学院まで」と回答する人が多くなる傾向がみられ、所得差があることが確認できます。

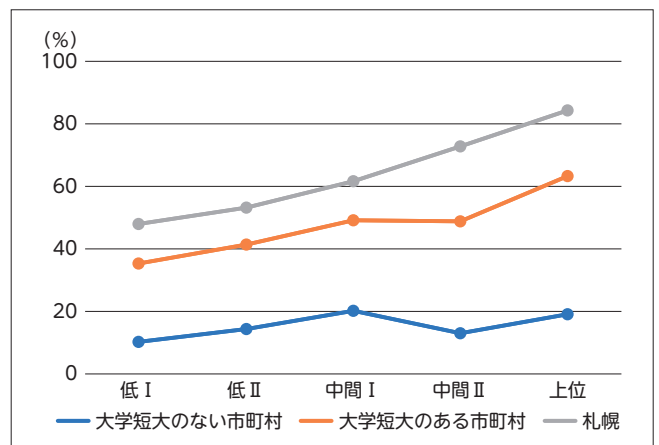


図 14：進学希望（「大学 / 大学院まで」）(高 2)

図 15 は、高校 2 年生の保護者に、お子さんが進学するとすれば学校にかかるお金の用意をどのようにするかをたずねた結果です。

「貯金をあてる」と回答する人の割合は所得が高くなるほど高くなり、「金銭的なめどが立っていない」割合は所得が低くなるほど高くなることがわかります。

また「奨学金を利用する」割合は、最も高い「上位所得層」を除くいずれの所得層でも 6 割程度にのびります。

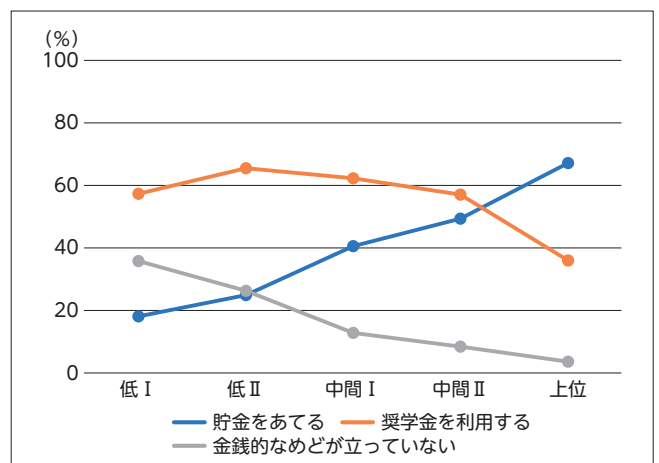


図 15：進学資金の準備状況（高 2 保護者）